

令和5年7月22日

南の風 483

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の続きを具体的に書きます。

激しいディフェンスを「理念」に掲げているチームであれば、ファウルはプラスに計算する（退場してしまったらマイナスにするなどの工夫もあり）、スティールは一つあたり+2にする、といった具合です。こうすることで、チームが目指している理念と評価指数という環境が連動し、理念の促進が浸透されます。分析のブロックが理念と環境の上にあるのはこういった側面を表しているのです。

また、EFF 以外にも±というスタッツを用いて選手を評価することができます。これは選手が出場している間の得点の経緯を表すもので、自分が出ている時間に得点差がプラスに何点推移したか、マイナスに何点推移したかを記録します。

スコアにも表れないし、印象に残るプレーもしないけれど、出場している時間は相手の得点が伸びないという選手がいるとします。もしかするとこの選手は相手が移動するコースを未然に防いでいたり、シュートされそうなコースをふさぐ動きをしていたりしている可能性があります。コーチはこういった部分にまで目を向けて選手を評価できると、バスケットボールの本質に迫る形で選手の育成を進めることができるのです。

次にシュートの分析について見ていきます。

シュートは試投数と成功数を押えておくのが必要と481号で書きましたが、できれば3P シュートやフリースローも、それぞれに記録しておくことがよいと思います。また、試投数と成功数だけでなく、シュートチャートをつけることも重要です。シュートチャートとは、相手チームや自分のチームの各選手がどこからシュートを打って、それが入ったのか外れたのかを記録するものです。

シュートチャートをつけておくと、試合中の対策になり、自チームのものも取っておくことで、こういった距離からのシュートが苦手か、こういったシュートに取り組んでいくべきかの材料になります。

また、考慮すべき点としてシュートチャートはシュートを打った「場所」に○×を付けることになるので、普通につけているとそのシュートを打った「場面」が分からないことになります。そのゴール下のシュートは1 on 1のドライブインで決めたものなのか、インサイドの1 on 1なのか、速攻のレイアップなのか、オフェンスリバウンドからのシュートなのか、スクリーンプレーが成功したのか。

このように、同じ場所に○があったとしても、それがどのような場面での○かが分からないと、対策を具体的に練ることができません。また、自チームを分析するうえでも、×を○にする練習を考える際に、その×がどんな場面での×なのか分からなければ、練習内容を決めることはできないのです。そのため、シュートの分析を徹底するのであれば、シュートを打った人、場所、場面、成否まで情報を集めることが重要です。そのうえで、戦術や戦略を練り、練習分析でどんな練習をしていくのかを定めていくのです。

U15、U12のカテゴリーでも、このシュート分析は大切なことであり、コーチやスタッフ、選手が分析結果を共有することにより、チームや個人がより成長していくのです。次号にします。